

## 『昭昧詹言』における義法と氣脈

浅井邦昭

はじめに

姚鼐によって、清朝文壇における桐城派の基礎は築かれた。彼は各地の書院で学問を講じながら、『古文辭類纂』や『今體詩鈔』などを編纂し、自らの文学主張を明らかにしていった。その結果、彼の許には多くの弟子が集まり、それが桐城派へと発展していったのである。

『昭昧詹言』の作者である方東樹も、彼の弟子の一人であり、梅曾亮、管同、劉開とともに姚門の四傑と称された。彼は桐城の人で、字を植之という。号を副墨子といい、晩年は儀衛老人とも号した。『攷槃集文録』『漢學商兌』『書林揚輝』『大意尊聞』などの著作がある。

方東樹は姚鼐の講学の席に侍ること最も久しく、師弟関係は密接であった。そのため、彼の文学主張においても、姚鼐

からの強い影響が見られる。例えば、『昭昧詹言』が論じるのは、ほとんどが王士禛『古詩選』と姚鼐『今體詩鈔』が選ぶ詩である。『古詩選』と『今體詩鈔』は、姚門で詩を学ぶための必須の書であった。また、姚鼐とその伯父姚範の詩評をそれぞれ数十条引いており、彼が姚門の教えに忠実であったことがうかがえる。

『昭昧詹言』には、さらに桐城派の祖とされる方苞や劉大櫛からの影響も見ることができる。劉大櫛については、「近代の真に詩文を知るは、郷先輩の劉海峰、姚薑塢、惜抱三先生に如く者は無し（近代眞知詩文、無如郷先輩劉海峰、姚薑塢、惜抱三先生者）」（『昭昧詹言』卷一 一四四則）といい、姚鼐と姚範に比肩する人物としている。また方苞の主張した義法が、『昭昧詹言』においても重視されていたことはすでに指

摘がある。彼らからの影響について、吳蘭生は「昭昧詹言序」において次のように言つ。

方植之の昭昧詹言、詩を學ぶ者矜<sup>うやま</sup>ひて秘笈と爲す。近歳、乃ち始めて盛行し、印を傳ふること凡そ數本なり。然れども其の書の載する所極めて宜しく分別し之れを觀るべし。蓋し録する所の方姚諸老の微言要旨至つて多けれども、而れども植翁自ら見る所を抒ぶれば則ち臆斷虚憍の習ひを免れざらん。(汪中編『方東樹評今體詩鈔』「昭昧詹言序」)

ここでは、彼が桐城三祖から強い影響を受けていることが示されている。桐城派の文学主張は、古文執筆のための議論が中心である。方東樹は方苞らの主張を吸収しながら、自らの詩論に応用しようとした。臆斷の傾向はあるものの、『昭昧詹言』の主張は、桐城派の系譜に位置づけることができるのである。

もともと桐城派の文学主張の成立には、八股文批評が深く関わっていた。これについては、筆者はすでに論じたことが

ある<sup>三</sup>。『昭昧詹言』においても、同じように八股文批評から影響を受けているという指摘も存在する<sup>四</sup>。そこで、今回は方東樹が重視した氣脈を取りあげ、八股文批評との関わりから論じることとする。さらに義法と氣脈との関係を明らかにすることで、方苞、劉大櫟、姚鼐から受けた影響を明らかにし、方東樹が桐城派の文学主張をどう発展させていったのかを考えたい。

## 第一章 『昭昧詹言』における義法

『昭昧詹言』において、方東樹は章法、文法、句法、篇法、古文之法など、さまざまな「法」を駆使した。方苞の主張した義法も、『昭昧詹言』では「法」の一つである。そこで、義法が方東樹以前にどう評価されていたかを明らかにした上で、『昭昧詹言』における義法理解について見ていくことにする。

義法は、方苞が特に重視した古文執筆のための規範である。現在では、義法といえば桐城派の文学主張として定着しているが、方苞の後継者たちは義法をそのまま受容していったわけではない。例えば、劉大櫟はほとんど義法に言及することがなかった。姚鼐は義法について一定の評価を与えてはいる

ものの、「其の太史公書を閲るに、精神其の大ひなる處、遠き處、疏淡たる處、及び華麗にして常に非ざる處を包括する能はざるに似たり。止だ義法を以て文を論ずれば、則ち其の一端を得るのみ（其闕太史公書、似精神不能包括其大處、遠處、疏淡處、及華麗非常處。止以義法論文、則得其一端而已。）」（『惜抱先生尺牘』卷五「與陳碩士 一」）と、義法では『史記』のすばらしさの一端しか得られないとして、その限界を示している。ここから、方東樹以前においては、義法が桐城派の文学主張として確立されていなかったことがわかる。

ところが、姚門の中でも、方東樹はとりわけ方苞に対する尊崇の念が篤く、義法を自らの文学主張に取りこんだ。その理由としては、「吾宗望溪宗伯」（『攷槃集文録』卷五「管輅之墓誌書後」）という表現に示されるように、同族に対する敬意がその根底にあると考えられる。『昭昧詹言』においても、「數十年深く古人の精思妙悟を究むるに非ざれば、義法を解せず（非數十年深究古人精思妙悟、不解義法。）」（『昭昧詹言』卷一「二十一則」）と言っており、義法を理解することの難しさを強調し、詩論における議論を展開している。つまり、方東樹は義法を再評価した人物と位置づけることができるので

ある。

それでは、実際に『昭昧詹言』における義法を見ていくことにする。方苞の義法としては、「義は即ち易の所謂言に物有るものなり。法は即ち易の所謂言に序有るものなり。義は以て經たりて法は之れを緯とし、然る後に成體の文たり（義即易之所謂言有物也。法即易之所謂言有序也。義以爲經而法緯之、然後爲成體之文。）」（『望溪先生文集』卷二「又書貨殖傳後」）という定義が最も知られている。

この「言有物」「言有序」という表現は、『昭昧詹言』においても、しばしば用いられている。彼がこの二つの定義をどのように理解していたかを示すものとして、次の例があげられる。

詩は以て志を言ふ。如し志の言ふべき無く、強ひて他人の説話に學べば、口を開くも即ち節を脱す。此れ言の物無く、誠を立てずと謂ふ。若し又た文法の變化精神の措注の妙を解せざれば、意を達せざるに非ざるも、即ち語録腐談と成る。是れ言の文無く序無しと謂ふ。若し夫れ物有り序有るも、而れども徳 其の人に非ざ

れば、又た鸚鵡猩猩の誚めを免れず<sup>五</sup>。『昭昧詹言』卷

一 六則)

方苞の義法は、古文を対象としていた。そのため、彼の「言有物」は、學術や治世に対する実用性に重点が置かれていた。

これをそのまま詩論に応用することはできない。そこで、「詩以言志」を踏まえて、方東樹は「言有物」を自分なりに解釈した。卷一冒頭でも「言の中に物有り。故に之れを聞けば感ずるに足り、之れを味へば彌々旨く、之れを傳ふれば愈々久しくして常に新し(言中有物。故聞之足感、味之彌旨、傳之愈久而常新)。(同上卷一 一則)と言っていることから、彼が定義する「言有物」とは、詩人の内なる志気を表現すること、作品が感動を生みだし、普遍性を獲得すること、言う。彼は方苞の「言有物」を借りながら、詩論に合うよう再定義をおこなったのである。

一方、「言有序」については、方苞の義法をそのまま継承したようである。義法の特徴として、方苞は文章の変化を重視していた。その例として、よく引かれるのが「書五代史安重晦傳後」である。

記事の文は、惟だ左傳史記のみ、各々義法有り。一篇の中、脈相ひ灌輸し、而も増損すべからず。然して其の前後相ひ應じ、或ひは隠れ或ひは顯れ、或ひは偏り或ひは全し。變化 宜しきに隨ひ、一道を主とせず<sup>六</sup>。

(『望溪先生文集』卷二「書五代史安重晦傳後」)

方苞は『左傳』『史記』の文章が一篇のうちで互いに呼応し、その変化は予測できないものであるとする。この義法の特徴を、方東樹は「言有序」において文法の変化と言いかえている。義法のうち、変化の重視という特徴は、『昭昧詹言』では文法として受容されたのである。

ここで、『昭昧詹言』における文法を明らかにしておく。文法とは「學詩之法」の一つである。「學詩之法」は、「創意艱苦」「造言」「選字」「隸事避陳言」「文法」「章法」の六項目である。その五番目の文法は次のように説明されている。

五に文法と曰ふ。斷を以て貴と爲し、逆挿し突起し、崢嶸として飛動すれば倒挽し、一筆として平順挨拶す

るを許さず。入りて言はず、出でて辭せず、離合虚實、  
參差伸縮たり。(『昭昧詹言』卷一 二二十八則)

文法では、表現の飛躍である「斷」を貴ぶ。下句の内容を  
あらかじめ迎えたり新たな境界を突如説き起こしたり、気が  
生き生きと動くならば収束させようとし、詩が平坦に続いて  
変化がないことを許さない。「入不言」「出不辭」「離合虚實」「參  
差伸縮」も、すべて作品における変化を表現している。ここ  
から、『昭昧詹言』の文法は、詩に表現された変化を特に名づ  
けたものであり、作品の具体的な構成を指すのではないこと  
がわかる。この変化の重視という点で、文法は義法の「言有  
序」と結びつけられたのである。

「書五代史安重晦傳後」は、方東樹にとりわけ影響を与え  
ている。ここで注目すべきなのが、「脈相灌輸」という表現で  
ある。拙稿「方苞の「義法」と八股文批評」で明らかにした  
ように、これに類似する八股文批評は方苞周辺でよく用いら  
れていた。例えば、戴名世の八股文集では、「血脈 人の上に  
注灌すれば、關合自ら緊きまし(血脈注灌於人上、關合自緊。)(『潛  
虛先生時文全集』「令人乍見 合下節」評)のように、「血脈」

を用いて表現している。

この「脈相灌輸」や「血脈注灌」という表現は、『昭昧詹言』  
にも受け継がれている。例えば、「此の篇文法高妙にして血脈  
灌輸す(此篇文法高妙而血脈灌輸。)(『昭昧詹言』卷三十九則)  
では、「灌輸」をそのまま用いて批評している。これは、方東  
樹が「書五代史安重晦傳後」の表現を意識していることを示  
している。また、ここで文法に言及していることから、『昭  
昧詹言』の文法と義法が近い関係にあることは明らかである。  
これ以外に「古人の文法の妙、一言以て之れを蔽はば、語接  
せずして意接すと曰ふ。血脈貫續して、詞語高簡たるは、六  
經の文皆な是れなり(古人文法之妙、一言以蔽之、曰語不接  
而意接。血脈貫續、詞語高簡、六經之文皆是也。)(同上卷  
一 八十二則)でも、文法を「血脈」とともに用いている。  
この例は「書五代史安重晦傳後」と内容も表現もさらに近く  
なっている。「語不接」は、方苞の「或隱或顯、或偏或全」で  
あり、「意接」は、方苞の「前後相應」である。これらは「學  
詩之法」における文法の「以斷爲貴」の特徴を具体的に示し  
たものと考えられる。ここから、方東樹の文法は、義法を詩  
に応用したものと言うことができるのである。

次に、『昭昧詹言』の義法が、どのような内容を含むものかを見ていくことにする。方東樹は「杜韓を學ばんと欲すれば、須らく先づ義法の粗胚を知るべし（欲學杜韓、須先知義法粗胚）」（同上卷八 十二則）と、杜甫や韓愈の詩を学ぶには、まず義法のあらましを知らねばならぬと言う。その上で、義法に含まれるものとして、「創意」「造言」「選字」「章法」「起法」「轉接」「氣脈」「筆力截止」「不經意助語閑字」「倒截逆挽不測」「豫吞」「離合」「伸縮」「事外曲致」「意象大小遠近皆令逼真」「頓挫」「交代」「參差」をあげている。

これは先の「學詩之法」をさらに詳しくしたものである。このうち「學詩之法」と共通するのは「創意（艱苦）」「造言」「選字」「章法」である。「隸事避陳言」は義法にはないが、義法の「選字」の注に「造言と同じ。同じく陳熟を去る（與造言同。同去陳熟）」とあるので、「隸事避陳言」は「造言」または「選字」に含まれると考えられる。そうすると、文法は「起法」以下の十四項目に相当することになる。つまり、『昭昧詹言』の義法は「學詩之法」そのものであるが、その中でも、特に文法に重点を置いたものと見なすことができるのである。

ここまで、方苞の義法と比較しながら、『昭昧詹言』で義法

をどのように理解したかを論じた。劉大櫟や姚鼐とは異なり、方東樹は義法を自らの文学主張に積極的に取り入れようとしている。ただ彼は方苞の義法をそのまま受容したのではない。一方で、義法の限界は当時すでに指摘されていた。そこで方東樹が新たに取りあげたのが、氣脈である。氣脈は先にあげた義法の項目にも含まれているが、これは方苞から直接の影響を受けたと見ることはできない。彼は新たに氣脈を義法に取りこむことで、義法の体系を強化したのである。そこで次章以降、氣脈について論じていくことにする。

## 第二章 方東樹以前における氣脈

文学批評としての氣脈は、作品に表現された氣の一種と考えられるが、桐城派の氣についてはすでに論考がある<sup>8</sup>。氣に関しては、方苞は「古文約選序例」（『望溪先生集外文』卷四）で「古文氣體」と称した。また、劉大櫟は神氣を、姚鼐は神理氣味を主張したことは、よく知られている。方東樹は新たに氣脈を主張したが、これは必ずしも彼の創作によるものではない。氣脈は、八股文批評においてすでに広く用いられていた。そこで『昭昧詹言』を分析していく前に、方東樹

以前の氣脈について見ておくことにする。

方苞の場合、氣について体系的に論じることがなく、氣脈も文集で言及されることはなかった。しかしながら、彼の八股文集では、氣脈ということばを見ることができ、その周辺では珍しくない表現であったことがわかる。

方苞は周囲と八股文を批評しあうことで、自らの文学主張を確立していった。その中でも、とりわけ影響を受けたのは韓菼である。彼は状元及第を果たした八股文の大家として衆望を集め、方苞ら後進の指導にも積極的であった。その評語にすでに氣脈が見えるのである。彼は「精語層出し、鈎連を用いずして氣脈凝結して一と爲る。其の源蓋し荀子より出でん（精語層出、不用鈎連而氣脈凝結爲一。其源蓋出于荀子）。韓慕廬先生」（『重訂方望溪全稿』「質直而好 三句」評）といい、精妙なことばが次々と出現し、ことば同士の連絡をつけようとしなくても、氣脈によって文章が一つにまとまっていると評している。韓菼は、氣脈が作品としての一体性をもたらすと考えていたのである。

韓菼以外にも、方苞の八股文集には氣脈を用いた例がある。それは「神理を嘘吸し、精融し浹洽し、運らすに大家の思力

を以てし、行らすに古文の氣脈を以てす。時文久しくして廢れざるは、此の種の文之れを延くなり（嘘吸神理、精融浹洽、而運以大家之思力、行以古文之氣脈。時文久而不廢、此種文延之也）。儲禮執」（同上「君子之道 全章」評）という儲文の評語である。先の韓菼の評語では、氣脈の淵源を荀子に求めた。ここでは、古文の氣脈をめぐるすとしている。ここから、彼らが氣脈をいう場合、特に古文における氣を想定していたことがわかるのである。

劉大櫟の八股文集においても、氣脈はしばしば批評に用いられている。その場合は、古文の中でも特に『史記』に限定される。ほとんどの場合、『史記』を山脈になぞらえ、その雄大さをたたえる表現として氣脈を用いている。その一例として、最も詳しい郭焮の評語を次にあげる。

太史公胸に千古有り。成敗興衰の故に於いて、瞭として指の上的の渦を旋らすが如し。筆を提げれば直ちに頂上より下を説く。故に其の氣脈洪遠にして、峰巒高大なり。惟だ歸震川のみ之れを知ること最も深し。所謂班孟堅より已に盡くは知る能はざる者なり。此の文正に史記の氣

脈より得て来る。郭昆甫九（『海峰制藝』堯曰咨爾 兩章）  
評）

ここでは『史記』の氣脈がはるかに遠く、峰々のつらなり  
が高く大きいようだとする。この境地は、班固すらすべて理  
解することができず、後には歸有光だけが理解することがで  
きたのである。この例から、方苞の八股文集では、古文の氣  
脈とややく理解されていたものが、劉大櫟になると、『史記』  
に集約されていた状況がわかる。

劉大櫟においても、この氣脈の理解は共有されていた。彼  
は『論文偶記』において自らの文学主張を披瀝しているが、  
氣脈についても、次のように言及している。

文は大を貴ぶ。道理博大なれば、氣脈洪大にして、邱  
壑遠大なり。邱壑の中、必ず峰巒高大にして、波瀾闊  
大なり。乃ち之れを遠大と謂ふべし。古文の大なる  
者は、史遷に如くは莫し。震川の史記を論ずるに、大  
手筆たりと謂ふ。又た起頭の處に來るに勇猛たるを得  
と曰ふ。又た連山 嶺を斷ち、峰の頭參差たりと曰ふ。

又た長江萬里の圖を畫くが如しと曰ふ。又た大塘の上  
に絳を打ち、千船萬船、相ひ妨礙せずと曰ふ。此れ氣  
脈洪大にして、邱壑遠大の謂なり一〇（『論文偶記』）

ここでは、文章は雄大であることを貴ぶこと、その代表が  
『史記』であり、その雄大さをよく理解するのは歸有光であ  
ることが述べられている。これは先の郭焮の評語と内容も表  
現もほとんど同じものである。つまり、劉大櫟は氣脈の理解  
を八股文批評から發展させることなく、『史記』の雄大さを示  
す表現として用いたのである。

ここまで方苞と劉大櫟の八股文集を確認し、彼らの周辺で  
氣脈がどのように使われていたのかを見てきた。八股文批評  
の氣脈は、すべての作品における氣を指すのではなく、古文  
における氣に限定されたものである。特に劉大櫟の周辺では、  
氣脈は『史記』の雄大さをたたえる表現として用いられてい  
た。『史記』は古文における最高の手本である。ここから、八  
股文批評では、『史記』など古文における氣の働きを示す最上  
級の表現として、氣脈を用いていたことがわかるのである。  
このように、方苞と劉大櫟にはわずかながらも氣脈とのつ



ながりを見ることが出来る。姚鼐の周辺でも、氣脈という表現は存在していた。例えば、姚範は「詩三百を誦すの下忽ち高峰を起すは、是れ史記の氣脈なり（誦詩三百下忽起高峰、是史記氣脈）。姚南青」（『海峰制藝』「誦詩三百 一節」評）といい、氣脈が示すものは劉大櫟の場合と同じである。ところが、姚鼐とその弟子の間では、氣脈に対する議論がほとんどない。その唯一の例外が、方東樹である。彼は古文においても、詩においても氣脈を重視した。そこで、次章では義法や八股文批評との関わりを踏まえながら、方東樹の主張する氣脈について見ていくことにする。

### 第三章 方東樹の氣脈

前章では、氣脈が八股文批評として用いられていたことを明らかにした。一方で、桐城三祖の文学主張において、この氣脈が十分に展開されることはなかった。この氣脈を、方東樹は詩論として新たに提出し、義法の欠陥を補おうとしたのである。本章では、方東樹の氣脈を分析することで、彼が試みた義法の補強について明らかにしていく。

方東樹は「答葉溥求論古文書」において氣脈に関する議論

をしている。それによれば、古人の作品は師と仰ぐべきであり、そのまま踏襲すべきでないとする。その上で、古今の作品を古今の水になぞらえ、「古今の水同じからず、同じ者は濕ほす性なり。古今の文同じからず、同じ者は氣脈なり（古今之水不同、同者濕性。古今之文不同、同者氣脈也）」（『攷槃集文錄』卷六「答葉溥求論古文書」）と言っている。古代の作品は現在とは時代が異なるため、そのまま踏襲する意味はない。ただし、作品の根底にある氣脈は、古今を問わず共通するものであると主張したのである。彼にとつて、氣脈はすぐれた作品を成立させる作用がある。このことは『昭味詹言』でも詳しく議論している。

章法有りて氣無ければ、則ち死形の木偶と成る。氣有りて章法無ければ、則ち粗俗の莽夫と成る。大約詩文は氣脈を以て上と成す。氣は行る所以なり。脈は章法を縮すべて隠るる者なり。章法は形骸なり。脈は細さこに形骸を束ねる所以の者なり。章法 外に在りて見るべきも、脈見るべからず。氣脈の精妙たる、是れ神の至りと爲す。俗人先づ句無く、進みて次に章法無く、進

みて次に氣無し。數百年 一作者も得ざるは、其れ茲  
ここに在るか<sup>十一</sup>。(『昭昧詹言』卷一 九十二則)

章法は「學詩之法」の一つであり、作品の構成に関わる規  
範である。ここでは、詩文の執筆において氣脈を追及するこ  
との重要性を議論している。氣は循環する作品の生命力であ  
り、脈は作品の構成を統率するものである。氣脈は表面にあ  
らわれないがゆえに、精妙なものであり、ここ數百年は氣脈  
を發揮した作者はいない。このように、方東樹は氣脈を具体  
的な技術を超えるものと考へた。彼にとつて、氣脈は詩文  
の執筆において追及することが最も難しい課題だったのであ  
る。

このように氣脈の要求が高い以上、彼が満足する作品を見  
出すことは難しい。そのため、『昭昧詹言』においても、氣  
脈への言及は限られ、卷八の杜甫に集中している。方東樹  
は「杜韓の眞の氣脈の作用は、聖賢古人の書を読み、義理志  
氣胸襟の源頭本領の上在り（杜韓之眞氣脈作用、在讀聖賢  
古人書、義理志氣胸襟源頭本領上。）」（同上卷八 六則）の  
ように、杜甫と韓愈にほぼ限定して氣脈を用いている。しか

も「眞」とつくのは、この二人だけであり、彼らに対する特  
別な評価の表れと言える。先に見たように、八股文批評では、  
氣脈はその対象が『史記』に限定されていた。古文における  
最高の手本であったからである。『昭昧詹言』では、八股文批  
評の氣脈を詩論に応用している。方東樹は氣脈の使用を杜甫  
と韓愈に限定することで、古文における『史記』と同等の地  
位を、二人に与えようとしたのである。

杜甫と韓愈を高く評価したのは、二人の詩が六経や『史記』  
『漢書』から吸収した義理や志氣をよく發揮したからである。  
その發揮されたものが、氣脈である。この点で、杜甫と韓愈  
に古文との一致を見出している。一方で、方東樹は「欲學杜韓、  
須先知義法粗胚。」<sup>十二</sup>といい、杜甫と韓愈の詩を学ぶには、義  
法を知らねばならないと主張した。義法も氣脈も、もともと  
古文や八股文の批評から借りてきている。両者は『史記』の  
すばらしさを伝える概念であり、それを杜甫と韓愈に集中さ  
せることで、方東樹は詩においても古文の価値観に基づく批  
評体系を構築しようとしたのである。

氣脈は義法の一項目にすぎないが、『史記』を最高とする点  
では、義法の中で特に重要な位置を占めている。だからこそ、

「義法粗胚」にあげられた項目の中で、氣脈だけを取り出して議論することが多いのである。ただ、方東樹がなぜ氣脈を新たに主張したかについては、さらに検討が必要である。そこには、桐城三祖との関係が影響を与えたと考えられるからである。そこで、最後に義法と氣脈の関係について論じることにする。

方東樹は方苞に対する尊崇の念がとりわけ篤かった。それは、方苞の文集や年譜に序跋をつけ、顕彰に努めていたことからもうかがえる。彼が方苞を最も高く評価した点は、やはり古文における功績であった。

即ち古文の一道を以て之れを論ずれば、能く古への作者の義法氣脈の韓歐相ひ傳ふるの統緒を得。明に在りては歸太僕熙甫を推し、昔人號して絶學と稱す。惟だ望溪のみ克く之れを承繼すれば、實に能く探して其の微文大義傳はらざるの秘を得、以て尊びて大業を成す<sup>上</sup>。(『攷槃集文録』卷四「望溪先生年譜序」)

これによれば、方苞は古文における義法と氣脈の絶學を継

承したとされる。ここで、義法の一項目にすぎない氣脈が、並記されていることは注意が必要である。もちろん方苞が義法を積極的に宣伝したことは広く知られていたが、氣脈はその文学主張とはほとんど関係があるとは見なされなかった。両者が並記されたのは、方東樹がある意図をもって氣脈を加えたからであろう。それは師である姚鼐への配慮である。

先に見たように、姚鼐によって義法の限界はすでに指摘されていた。義法は確かに文章を議論するのに有用だが、『史記』の雄大さや華麗さといった特徴を、捉えきえることはできない。これは、義法では作品の精神性を把握できないという欠陥である。『昭昧詹言』において義法を取りあげるとき、当然この師の指摘を意識する必要があった。そこで、義法の再定義をおこなったのである。

この問題に対して、彼は義法に氣脈を加えることで解決しようとした。氣脈は桐城三祖の周辺ですでに用いられており、特に劉大櫟の周辺では『史記』の雄大さの評価に限定されていた。方東樹はこの八股文批評の氣脈を取りこむことで、精神性の把握ができないという義法の欠陥を解消しようとした。つまり、新たに自らの主張として氣脈を提示することで、姚

竊の指摘に配慮しながら、方苞の義法理論をさらに強化したのである。

『昭昧詹言』になると、「望溪先生年譜序」より、さらに氣脈の重要性が強調されるようになる。その一例を次にあげる。

文通じて理通ぜざる者有るは、是れ學の上の事なり。理通じて文通ぜざる者有るは、是れ才の上の事なり。文と理と俱に清通すれども平滯して、奇妙高古の人を驚かす無きは、是れ法の上の事なり。然らば徒らに義法を講じても、而れども精神氣脈を解せざれば、則ち古人の妙に於て、終に未だ領會悟入する處有らざるは、是れ識の上の事なり<sup>上</sup>。(『昭昧詹言』卷一 二十三則)

ここでは、詩における「學」「才」「法」「識」について議論し、義法と氣脈は「識」に属す。彼は、義法によって作品を論じるだけで、精神氣脈を理解していなければ、古人のすばらしさは深く領會できないと主張する。この議論は、まさに姚鼐の指摘した義法の限界である。方東樹は義法では把握できないものを、精神氣脈と名づけた。そのため、ここでは氣脈が

義法に優先されることとなった。氣脈は義法の一項目であるが、時に義法と並記され、時に義法より優先される。氣脈が特別扱いされたのは、作品の精神性を把握できることを主張することで、義法理論がより完全になるからである。つまり、方東樹の氣脈は、姚鼐の指摘に対する彼なりの対応策と見ることができると。

ここまで、方東樹がなぜ氣脈を新たに提出したかについて論じてきた。詩作の規範として、義法を応用したのは方苞からの影響である。一方で、姚鼐の義法に対する批判についても、解決しておく必要があった。それが氣脈が取りあげられた理由である。義法に氣脈が加わったことで、方苞だけのものではあつた義法は、方東樹という後継者を得ることになった。義法が詩作でも規範となつたことは、桐城派の文学主張に新たな可能性をもたらしたのである。

#### おわりに

本稿では、方東樹の義法と氣脈について論じてきた。『昭昧詹言』において、彼は詩論として義法を大きく取りあげた。これは義法がふたたび注目される一つのきっかけとなつた。

三石氏によれば、桐城三祖が確定するのは、方東樹の「書借抱軒先生墓誌後」によつてであるとされる<sup>十四</sup>。方苞から劉大櫟を経て姚鼐につながる系譜を確定させた点で、方東樹は桐城派の成立に大きく寄与している。方苞の義法を改めて取りあげたのも、文学流派として発展させようとする意識の表れと見なすことができるのである。

ところが、この義法については、三祖の間で評価が一致しない。方苞は積極的に自らの義法を展開したが、方東樹以前には、はっきりとした信奉者は出現しなかつたのである。姚鼐もまた義法の欠陥をあげ、全面的な賛同を示すことはなかつた。方東樹としては、師の主張に従いながら、義法を自らの文学主張に取り込むことを模索しなければならなかつた。そのため、氣脈が義法の中で重要な位置を占めるようになったのである。

氣脈は八股文批評として桐城三祖の周辺で用いられていたが、彼らの文学主張にそれほど影響を与えることはなかつた。この氣脈を、方東樹は作品に表現された精神の微妙な働きとした。それにより、義法では把握できないとされた作品の精神性も評価できるようになつたのである。この氣脈を導入

することで、姚鼐が指摘する義法の欠陥は、一応解消された。その意味で、氣脈は義法を再評価するための、方東樹の苦心と見ることができるのである。

今回は桐城派の確立という観点から、義法と氣脈に限って論じた。ただし、吳闈生が指摘しているように、『昭昧詹言』は詩論としては必ずしも方苞らの主張に忠実な訳ではない。最後の卷二十一が「附論諸家詩話」であることからわかるように、桐城三祖からだけでなく、方東樹はさまざまな詩論から影響を受けている。「法」に限つても、『昭昧詹言』ではさまざまな「法」を用いて議論を展開しており、そこには混同も見られる。「法」の一つとしての義法の位置づけは、十分に明らかにしたとは言いがたいので、他の「法」との関係については、今後の課題としたい。

注

一 吳宏一「方東樹《昭昧詹言》析論」(『清代文學批評論集』聯經出版 一九九八年)

二 方植之昭昧詹言、學詩者矜爲秘笈。近歲、乃始盛行、傳印凡數本。然其書所載極宜分別觀之。蓋所錄方姚諸老微言

要旨至多，而植翁自抒所見則不免臆斷虛僞之習。

三 拙稿「方苞の「義法」と八股文批評」(『日本中国学会報』第五十三集 二〇〇一年)、「劉大槲の文論と八股文批評」(『金城学院大学論集』人文科学編第二卷第二号 二〇〇六年)

四 汪紹楹『昭昧詹言』「校點後記」(人民文学出版社

一九六一年)、黃霖『近代文學批評史』第二章傳統詩文批評 第七節梅曾亮、方東樹、曾國藩、吳如綸、嚴福、林紓等桐城派 (二) 方東樹(上海古籍出版社 一九九三年)、楊淑華『方東樹《昭昧詹言》及其詩學定位』第五章《昭昧詹言》與宋詩創作意識的體現 第三節標榜以文法評詩(『台灣國立成功大學中文系博士論文 二〇〇四年])

五 詩以言志。如無志可言、強學他人說話、開口即脫節。此謂言之無物、不立誠。若又不解文法變化精神措注之妙、非不達意、即成語錄腐談。是謂言之無文無序。若夫有物有序矣、而德非其人、又不免鸚鵡猩猩之誚。

六 記事之文、惟左傳史記、各有義法。一篇之中、脈相灌輸、而不可增損。然其前後相應、或隱或顯、或偏或全。變化隨宜、不主一道。

七 五曰文法。以斷爲貴、逆攝突起、崢嶸飛動倒挽、不許一筆平順挨接。入不言、出不辭、離合虛實、參差伸縮。

八 三石善吉「桐城派における氣 詩文論を中心として」(『氣の思想』東京大学出版会 一九七八年)

九 太史公胸有千古。於成敗興衰之故、瞭如指上旋渦。提筆直從頂上說下。故其氣脈洪遠、峰巒高大。惟歸震川知之最深。所謂自班孟堅已不能盡知者也。此文正從史記氣脈得來。

郭昆甫

十 文貴大。道理博大、氣脈洪大、邱壑遠大。邱壑中、必峰巒高大、波瀾闊大。乃可謂之遠大。古文之大者、莫如史

遷。震川論史記、謂爲大手筆。又曰起頭處來得勇猛。又曰連山斷嶺、峰頭參差。又曰如畫長江萬里圖。又曰大塘上打緯、千船萬船、不相妨礙。此氣脈洪大、邱壑遠大之謂也。

十一 有章法無氣、則成死形木偶。有氣無章法、則成粗俗莽夫。大約詩文以氣脈爲上。氣所以行也。脈縮章法而隱焉者也。章法形骸也。脈所以細束形骸者也。章法在外可見、脈不可見。氣脈之精妙、是爲神至矣。俗人先無句、進次無章法、進次無氣。數百年不得一作者、其在茲乎。

十二 即以古文一道論之、能得古作者義法氣脈韓歐相傳之統

緒。在明推歸太僕熙甫、昔人號稱絕學。惟望溪克承繼之、實能探得其微文大義不傳之秘、以尊成大業。

十三 有文通而理不通者、是學上事。有理通而文不通者、是才上事。文與理俱清通而平滯、無奇妙高古驚人、是法上事。然徒講義法、而不解精神氣脈、則於古人之妙、終未有領會悟入處、是識上事。

十四 三石氏前揭論文